

#23

## 薬剤師 地域で一番身近な医療人



今回のゲストは、薬剤師の野村大祐のむらだいすけさんです。「どんな人でも必要としてくれる場所に行こう」と薬剤師を目指し、大学卒業後、調剤薬局のチェーンを展開する会社に就職。19年目の今は、店長としてスタッフに目を配りながら、薬を処方通り正確に渡す仕事をしています。地域の人たちが気軽に通える身近な薬局が理想だという野村さんに、薬剤師の仕事について詳しく伺います。



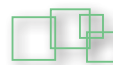
MC・リポーター  
廣村季生

### 薬剤師の仕事とは

「薬剤師」は、病気の治療や健康維持のための「薬剤」を扱う専門職で、国家資格が必要です。専門知識を生かし、医師の処方箋にもとづいて薬を調剤したり、患者に服薬の指導をしたりします。働く場所は、調剤薬局、病院、ドラッグストア、製薬会社、研究機関などさまざまです。

### 薬剤師になるには

大学で専門的な教育を6年間受けた後、薬剤師国家試験に合格して免許を取得する必要があります。国家試験の合格率はおよそ7割（2020年）。現在日本では30万人を超える薬剤師が活躍されています。



このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。



## 薬剤師・野村大祐さんに聞きました！

**廣村**：野村さんは薬剤師としてどんな職場で働いていらっしゃるんですか？

**野村**：今は、調剤薬局のチェーンを展開する会社に就職して19年目となります。私が働いているのは主にクリニックの前にある薬局で、整形外科や内科、精神科とか、そういったさまざまな処方箋を扱うような薬局で働いています。「その地域で住む人たちが処方箋を持ってくる」そんな薬局です。

**廣村**：私も時々調剤薬局に行くんですけど、薬を出すって責任が重い仕事ですよね。

**野村**：そうですね。お薬は患者さんによっては命をつなぐものであったり、つらい症状を改善するものであったり、当たり前な日常を過ごすために必要なものだったりするんですよね。廣村さんは「かかりつけ薬剤師」ってご存じですか？

**廣村**：ポスターを見たことがあります。

**野村**：あ、そうですね。薬局に今、ポスターが飾られたりしているんですけども、「かかりつけ薬剤師」っていうのは「一人の患者さんに対して一人の薬剤師が担当して、その方のお薬の管理をする」そういった制度なんですね。そうすると、患者さんもいろいろな相談をしやすくなって、実際に処方箋がなくても、体調について薬局に相談に来られたりとか、あとは通常の日常会話だけをして帰られる……そういった方が来たりもします。

あと（私）は店長なので、働いているスタッフの方への目配りとかもやったりもします。

**廣村**：薬を扱うだけではなくて、人とのかかわりが大切なんですね。

### 仕事で気をつけている3つのこと

**廣村**：調剤薬局っていろんな人がいますが、全員薬剤師さんなんですか？

**野村**：いいえ。薬剤師だけではなくて、（処方された薬の名前や用法用量の）入力を主にするような事務の方や、私たちの薬局には管理栄養士もいます。その中で薬剤師は処方箋が正しいかどうか、そういった確認を必ずしています。

**廣村**：野村さんがお仕事をするうえで気をつけているのはどんなことですか？

**野村**：はい。「3つ」あります。1つは、「安心で安全な薬を処方通りに正確に出すこと」です。これが実は大変な作業なんですね。まず「安心」っていうのは、患者さんによってはアレルギーをもっていたり、薬で副作用が出た方がいたりします。その方に「本当にこの薬は合ってるか」っていうことを確認していきます。「安全」っていうのは「そのお薬の量が本当に正しい量で処方されているか。また、正しい飲み方で処方されているか」。この2つが間違いないことが確認できたら、それを処方箋に書かれた通りのお薬と数を、間違いなく準備してお渡ししていくんですね。ただ、例えばお医者さんも人間ですから、間違った薬の量を出してしまうこととか、パソコンの操作ミスみたいなこととかもしてしまうことがあります。それが万に一回の間違いだだとしても、それを見逃してしまうと、あとは患者様が直接そのお薬を飲んでしまうしかないんですよね。そうすると、逆に体調を崩

してしまうこともありますので、「絶対に見逃してはいけないこと」。なので、「薬剤師は、最後のとりで」のような役割でもあり、そのために薬剤師はすべての処方箋について真剣に確認をしています。

**廣村**：なるほど。正しく、間違いなく薬を出すのは大変ですね。2つ目は何ですか？

**野村**：その作業を「できるだけ少ない時間でお渡しする」ようにしているんですね。患者さんは体調を崩されている方もいるので、お待ちできる時間って限られてます。で、私たちの薬局では平均でだいたい10分から15分程度で、できるだけ、その待ちの時間を少なくしながら作業をしています。

**廣村**：そういう心遣いってとってもうれしいですよ。では、もう1つ気をつけていることってなんですか？

**野村**：そうですね。「働いてるスタッフが、働きやすい環境でいられるようにすること」です。なんとなく薬局って「薬剤師が一番偉い」みたなところってあるかもしれないんですけど、実は1枚の処方箋に対して私たちの薬局ではだいたい5、6人の人がかかわってます。

**廣村**：そんなにかかわってたんですね。

**野村**：そうなんです。そういう意味では全員がやるべき仕事をしっかりやっているから、安全で安心な薬をお渡しすることができるんですね。なので、「だれかが偉い」ということはなくて、「全員がお互いを尊重しあえるような雰囲気で働ける」ようにしています。で、そういった雰囲気が、結果的に薬局の雰囲気にもつながって、患者さんにも伝わるんですよ。

**廣村**：「1枚の処方箋に5、6人がかかわっている」っておっしゃってましたけど、それぞれどんな役割があるんですか？

**野村**：処方箋を「受け付けする人」がいて、で、その後に「処方箋通りに入力する人」、「お薬は正しいかどうかを確認する人」、「そのお薬を準備する人」で、「最終的にそのお薬が（処方箋と）合ってるかどうかを確認をする人」がいて、で、「お薬をお渡しする薬剤師」がいます。最後は「お会計をする人」もいるので、結構多くの人がかかわっているんですね。

**廣村**：仕事をしていて、やりがいを感じるのはどんなときですか？

**野村**：やっぱり、患者様からの「ありがとう」っていうひと言ですかね。患者さんによっては、お医者さんにはなかなか相談できないことを、薬剤師に相談される方とかもいらっしやいます。そういう相談に乗って、患者様が分からなかったことが分かったり、困ったことが解決できたときに「ありがとう」って言って笑顔で帰られる姿を見ると、「本当によかったな」って思います。

**廣村**：病気のときって不安になりますから、薬局がそういう場所だとありがたいですね。

**野村**：ありがとうございます。「地域の方が健康について気軽に通える薬局」がいいと思います。うちの薬局は、土地柄か、よく道を聞きに入ってくる方もいらっしやるんですね。そういう感じでいいのかなって思ってます。

**廣村**：アットホームな感じなんですね。

**野村**：そうですね。

進路が決まらない！その時したことは……

**廣村**：野村さんはどんなきっかけで薬剤師を目指すようになったんですか？

**野村**：僕は、はじめから薬剤師になろうと思ってたわけではなくってですね。僕はいわゆる進学校って言われる高校に通っていて、理系のクラスだったんですけども、高校2年生のときに、自分の進む学部を決めないといけないっていう時期があったんですね。で、そのときに周りがどんどん学部が決まっていく中で、自分だけなかなか決まりませんでした。そのときに何をしたかっていうと、もう一度「自分のとりえが何なのか」を考えるために、ノートに自分のいいところ、悪いところを、全部書き出しました。それでもちょっと、出てこなかったんですね。そこで「どんな人でも必要としてくれる場所に行こう」って考えて、「海外支援」が頭に浮かびました。で、そういった所に行くためには専門的な資格をもっていないといけないかなと思って……医療に興味があって、生物と化学が好きだったので、薬学部を決めました。医療にかかわる人が家族にいなかったの、うちの家族はすごくびっくりしました。

**廣村**：そのときノートに書き出した野村さんのいいところと悪いところってどんなところだったんですか？

**野村**：そうですね。自分のいいところっていうのは、物ごとをネガティブに考えないで、前向きに考える性格ではあったので、そういったところが確かノートに書いてあったような気がします。悪いところっていうのは、結構優柔不断なところがありまして、だからなかなか学部も決まらなかったんですね。

**廣村**：いいところと悪いところを書きだしたことで、薬剤師につながった部分っていうのはどういうところだったんですか？

**野村**：今考えると、何かを相手のためにしていきたいとか、相手のためになることをやりたいとか、そういった思いが、今の仕事につながっているかな……って思っています。

薬剤師にもいろいろは職場がある！

**廣村**：薬剤師の資格を取るにはどういう方法があるんですか？

**野村**：今は、まず、薬学部に入って6年間大学で勉強をしてですね、大学を卒業した後に、国家試験に合格する、そういった必要があります。

**廣村**：野村さんは調剤薬局の会社に就職されましたが、薬剤師はほかにどんな場所で働いてるんですか？

**野村**：病院であったり、ドラッグストアとか、製薬メーカーであったりとか、研究所などで働いてる方もいます。

**廣村**：お仕事をするうえで、それぞれどんな特徴があるんですか？

**野村**：例えば病院の薬剤師さんは、主に入院されてる患者さんのお薬を調剤したりとか。ドラッグストアで働いてる人は、一般のお薬を販売したり、サプリメントを扱ったりとか。製薬メーカーさんですと、実際に自分で作ってるお薬をお医者さんに説明したり、そういった

仕事をしています。

**廣村**：薬剤師さんっていてもいろんなお仕事があるんですね。

**野村**：そうですね。薬剤師といっても、今はいろいろな場所で働く所があります。

### 好きな音は……土曜の朝の街音

**廣村**：仕事の中で、野村さんが好きな音ってありますか？

**野村**：はい。これは直接仕事の中での音ではないんですけども、特に土曜日ですね、出勤前の地下鉄から地上に出るときですね、「街のまだ静かなときの音」。このときの音はすごく好きです。

**廣村**：なんで土曜日なんですか？

**野村**：はい。実は僕が働いてる薬局は日本橋（東京）にあるんですけども、平日はすごい通勤ラッシュで、結構朝はたくさんの方がいるんですね。ただ土曜日は、そういった人たちがいなくて、静かな朝なんですね。で、その後1日が始まるとドタバタしてしまうんですね。その前に、ちょっと落ち着いた気持ちになれるので、すごく自分の中では好きな音になってます。

### 薬剤師に向いている人とは？

**廣村**：野村さんは、薬剤師に向いているのはどんな人だと思いますか？

**野村**：そうですね、「2つ」あると思っています。

**廣村**：2つ。

**野村**：はい。まずは、「医療に携わりたいという気持ちがある人」。薬剤師は目の前に患者様がいらっしゃるって、で、その患者様に対して、「もっと健康になってほしい」とか、「病気を治してほしい」とか、そういった思いが強くなります。「その人に何かをしてあげたい」という気持ちがあれば、薬剤師にはなれると思いますので、医療に携わりたいたいという気持ちがあるといいと思っています。

で、2つ目に、「人と話をするのが好きな人」ですね。薬剤師は、やっぱり、患者さんとたくさん話す機会があります。そういった意味でいうと、会話をしながらその患者さんのことを知っていくような、そういったことも必要になってきます。ただ、人と話をするのは得意不得意がありますので、ここは、仕事をしながら慣れていける部分なのかなとも思っています。

**廣村**：私、結構おおざっぱなんですけど、おおざっぱな人は向いてないんですかね？

**野村**：あ、そんなことはないですよ。あの、やっぱり、薬剤師にもいろんな人がいますし、おおざっぱな性格であっても、「仕事がどれだけ大事か」というのが分かっているれば、仕事をするときはきちんと注意をして、ミスなく、みんな仕事ができるようになっていきます。

薬剤師は、話しかけると喜びます！

**廣村**：薬剤師に興味がある高校生は、何かやっておくといいいことってありますか？

**野村**：そうですね。医療って、とっても実は身近なものだと思うんですね。なのでまず、「身の回りの医療について関心を持つ」ことかと思います。例えば家族の方の病気のことだったり、自分自身の健康のことについて興味を持つ。そういったことに強く関心を持っていくといいと思います。あとは、実際に薬局に行って、薬剤師さんの仕事の様子を見てみるのもいいと思うんですね。薬剤師さんって話しかけてもらうのってすごく喜ぶんですよ。

**廣村**：あ、そうなんですか。

**野村**：はい。なので実際に行ってですね、健康相談をしてみたりとか、自分の興味のあることを聞いてみる。そうやって話しかけてみることから始めるといいんじゃないでしょうか。

**廣村**：実際に仕事の様子を見てみるっていうのは、より仕事の内容を知ることができて、すごくいい経験になりそうですね。

**野村**：はい。薬剤師さんは喜ぶと思います。

**廣村**：目指す仕事が見つからなくて悩んでいる高校生には、何かアドバイスありますか？

**野村**：そうですね。それには自分もそうだったので、すごくよく分かります。で、僕自身がやったように、自分自身をもう一回見つめ直して見て、「自分ができること、得意なこと、好きなことって何かな」って、振り返ってみる。例えば周りの友達とか、家族に聞いてみる。そういったことをやってみると何か見つけられるんじゃないでしょうか。

続けられたのは……「仕事が好き」だから

**廣村**：野村さんが19年間この仕事を続けられたのはなぜだと思いますか？

**野村**：そうですね。僕はやっぱり、「辞めないこと」だと思います。もちろん19年の中には、つらいことも大変なこともあり、もちろん今もあります。ただ、そういうときにこそ、辞めないで続けるという、そういった選択肢があっていいと思います。辞めないで続けると、自然と実はそこに助けてくれる人が出て来たり、実際その状況にしばらく身を任せていると、状況が変わったりすることもあります。そういうときに出会った人たちって、結構一生ものの関係になったりとかするんですね。だからあえて僕は、辞めないっていう選択肢も必要なんじゃないかなと思っています。

**廣村**：野村さんはなぜ辞めなかったんですか？

**野村**：そうですね……やっぱり、そもそも「この薬剤師っていう仕事が好きだから」っていうのがあると思います。あとはですね、「つらいときでも、何ごとにもポジティブに、前向きに考えるようにしていた」っていうこともあると思います。

**廣村**：例えばどんなふうに前向きに考えていたんですか？

**野村**：例えば自分にできなかった仕事とかがあって、つらかったかたときとか、大変なときですね、それでもやっぱり悩むことはあるんですけども、「もしそれができるようになったら」とか、「できたときにどんな人が喜ぶかな」って思ったり。そういうふうに考える

ようにすると、自然と前向きになれて、その仕事に取り組めたりしました。

**廣村**：なるほど。

薬剤師は、一番身近な医療人

**廣村**：改めて、薬剤師の仕事の魅力って何だと思えますか？

**野村**：お薬って本当に、「すぐに手に入る身近な医療」だと思うんですね。で、薬剤師もそれと同じように、「ドアを開けたらすぐにいる、地域で一番身近な医療人」だと思ってます。だから、そういった身近な薬局がその地域の中心になって、健康でいつまでも笑顔で過ごせる……街の皆さんをそうしていければいいのかなって思ってます。

**廣村**：最後の質問ですが、野村さんの夢ってなんですか？

**野村**：実は今、会社で取り組んでいる新しい仕事を大きく広めていきたいと思ってます。廣村さんは「スポーツファーマシスト」って聞いたことがありますか？

**廣村**：初めて聞きました。どういうものですか？

**野村**：はい、「ドーピングについての専門知識を持った薬剤師」のことで。ドーピングって、薬などを使って自分の競技力以上の力を出すことで、より高い順位を得ようとするようなことなんですね。それはフェアではない状態で、すごく良くないことなんです。日本においては、知らずにうっかりそういったお薬を口にしてしまって、競技に出られなくなってしまっている人がいます。そういったことがないように、アスリートやそこにかかわる人たちに、知識を伝え、きちんとフェアな状態で競技に臨めるようにしていきます。こういったスポーツファーマシストを、広めていきたいと思ってます。

**廣村**：スポーツに薬剤師さんがかかわってるのは知らなかったです。野村さんはスポーツにも興味があるんですか？

**野村**：僕自身小学校から大学まで剣道をやってましたし、今はマラソンやっています。自分の好きな趣味の延長上に、薬学っていう仕事にかかわる専門知識がかかわってくるのは、すごくいいことだなと思っていて、本当に薬剤師冥利に尽きるなって思ってます。これはやってよかったなって思ってます。



★あなたは、どんな薬剤師さんだったら、健康の悩みを相談しやすいと思いますか？

.....  
.....  
.....

★間違いなく正確に薬を出すために、どんな工夫ができるか考えてみましょう。

.....  
.....  
.....

★あなたは、つらくても辞めなかったことはありますか？ それはなぜですか？

.....  
.....  
.....

.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....  
.....

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。